集団の成立とその個性

木　下　治　雄　（動物・名誉教授）

東大をやめる二三年前からごく最近まで，夏になると三崎の臨海実験所でゴンズイという魚の群れについて実験を楽しんできた。この魚は数百の個体が互に触れ合わんばかりに寄り合って球形の群れを作りながら岩礁の間をゆっくり移動しているもので，実は四十数年前に動物学教室の学生として臨海実習を受けた際，始めてみるその見事さに息がつまりそうな感動を受けた事を覚えている。実際，この群れは全体として一つの生物個体に見違えるほど見事に統制のとれた集団行動を示す。そのくせ，群れにリーダーは存在せず，同格的な個体の集団に過ぎない。この様な集団が形成されるのは，各成員個体のどの様な性質に基くかについて知り得た事を要約すれば次の二つになる。

(1)「ゴンズイは自分と形や大きさの似た動く物体を見てこれに接近，追尾，同行して，自分の視覚映像を不動に保とうとする性質を先天的に持っている」このように，ゴンズイはまず視覚によって仲間のゴンズイばかりでなく，形や大きさ，動きの似通った他種の魚にも本能的に近付くが，永続的な群れが作られるか否かは次の(2)によってきまる。

(2)「ゴンズイは他種の魚のにおいには全く引かれないが，仲間のゴンズイのにおいにはよく誘引される。しかも，ゴンズイは自分の群れのにおいには最も強く引かれるが，他のゴンズイ群のにおいにはあまり引かれない。この様に群れの個性をかぎわける能力は，ゴンズイが自群と行動を共にしている間に後天的に獲得される」

つまり，ゴンズイが集団を形成する基本要因は二つある。一つは(1)「類は友を呼ぶ」方式の本能的なもの，他は(2)「朱に交れば赤くなる」方式の学習的なものである。

さて，急に話題を変える様で恐縮だが，東大を離れたいま，小生の快い回想の一つは理学部内に横溢する他学部とは違った純乎たる強い個性ともいうべきものであった。また，各教室を比べると，ここにも考え方や対処の仕方などにかなり判然とした個性があった。更に講座についていえば，学問研究に関する事は別にしても，趣味・嗜好さては字体や歩き方，しゃべり方，せきばらいに至るまで大先生そっくりといったほゝえましい風景に接することが屢々であった。このような研究教育集団の個性 ── 高尚な意味合いでは学風 ── がひとりでに形作られる原因としては，(1)同じ様な傾向の者が集まる事と(2)集まっている内に同じ様な傾向を帯びるようになる事とがあると思われるが，魚の集団（英語でSchoolと呼ばれるのもこの際興味がある）についてこれと似た上記二つの要因が指摘されたのは必ずしも偶然の符合とはいえない気がする。昔と違って，「学風を慕って師の門をたたく」といった風潮はあまり見られなくなり，上記(1)の傾向よりむしろ(2)の方が目立つ昨今であるが，それにしても大学の，学部の，教室の，講座の良き個性は大切にもり立てていきたいものである。

最近はやたらに新設の大学がふえ，しかも何事によらず（低位のレベルへの？）均質化の時代なので，大学の個性はあまりはっきりしなくなっている。私の所属する埼玉医科大学も，その新しくふえた大学の一つであるが，独自の立派な学風が醸成されていく様，強い関心を払っている。